



想文研だより

Vol. 3

2016年4月

発行/NPO 法人 想像文化研究組織編集室

658-0003 神戸市東灘区本山北町6丁目2-13 メール/ici.uemura2010@gmail.com 電話/080-8946-5171

プログラムを リニューアルします！

全ての催しにオープンな空間を

新しい高齢者文化の創造を目指して発足したこの組織も今年で4年目を迎えます。よちよち歩きの小学一年生から始まって、4年生に進級するのを機に、今までのプログラムを改善することにしました。

これまでは、実際的な問題を扱う臨床的なアプローチの「カフェ・タナトロジー」と、日本人の死生観の行方を探ってゆく死生学的な「カレッジ I C I」を分け、さらに一年を3学期に分けて、それぞれ3回シリーズで開催してきました。しかし両者の区別がつきにくくなり、またすぐに役に立つノウハウ的な講座は巷にあふれるようになり、3回シリーズで新鮮さを保つのが難しくなってきました。カレッジのほうは私たちにしかできない企画なので続けしてほしいという声が大きかったのですが、毎月一回という日程の縛りのために講師の日程と合わせるのが一苦勞でした。

カフェ・タナトロジーは「カフェ・タナトロジー スポット」と名前を変えて臨機応変に開催し、カレッジ I C I のほうも、「新カレッジ I C I」と名前を変えて回

NPO 法人想像文化研究組織理事長 上村くにこ

数や開講スタイルを多様化することにより、より幅広い学際的死生学を追及できるようにしました。

さて今回の目玉は「ピア・サロン」という新しいプログラムで



す。ピア (PEER) とは「同等の立場の仲間」という意味です。そんな人達が集いあう場を創りたいという願望をこめて名付けました。本・映画や新聞記事などをネタに、参加者が意見を忌憚なく交わしあうサロンです。ファシリテーターはおりますが、その場の出席者が主役です。毎회가一期一会の場になるでしょう。また、大小とりまぜた規模の講演会も適宜開きます。

以上が変更点ですが、発足以来決して変わらず、さらに徹底させたい基本方針があります。「講師と参加者が同じ平場に立って話し合う」という鉄則です。それがいちばん楽しく、スリリングで、また意味があるということ、この4年間で身に染みて体験しました。すべての催しにオープンな空間を創造してゆきます。

新企画

新カレッジ I C I <「いのち」のつながり方>

2016年6月11日(土) 14:00~16:00	細胞は「いのち」の場である — 遺伝子の脚本にしたがって タンパク質が演技をする —	甲南大学名誉教授 道之前 允直
2016年6月18日(土) 14:00~16:00	「いのち」のつながり方には二通りある — 自然は不老長寿を好まない —	奈良女子大学名誉教授 高木 由臣
2016年6月25日(土) 14:00~16:00	「いのち」は38億年の歴史を持つ — 生老死は進化の産物 —	奈良女子大学名誉教授 高木 由臣

少しアカデミックな講座を新しいスタイルで組んでいきます。今学期は3週連続で、原始細胞誕生から38億年、今の私たちまで、いのちはどうつながってきたのか、講師といっしょに探してみたいと思います。

映画「水と風と生きものと」上映と中村桂子さんトーク 盛況でした！



甲南大学との共催で開催。総合司会の甲南大学広報部の松岡さん（左）。中村桂子さんは舞台から降りて参加者の質問に丁寧に応えてくださいました。



2016年3月15日、平日にもかかわらず、200名を超す参加で、熱いトークが展開されました。



ロビーではJT生命誌館からの出張展示「いのち愛（め）づる国の物語」が運ばれ、熱心に見入る参加者でにぎわいました。トーク終了後の著書サイン会には長い列ができました。



公開講演会「医療は高齢者をしあわせにするのか。」

7月23日(土)14:00～ 甲南大学甲友会館大ホール

講師 久坂部羊氏

久坂部羊(くさかべ・よう)氏プロフィール

大阪府生まれ。大阪大学医学部卒。作家・医師。主な著書に『廃用身』、NHK連続ドラマで話題を呼んだ『破裂』、第3回日本医療小説大賞受賞の『悪医』など、主に医療をテーマにした著書多数。ご期待ください。

新企画 ピア・サロン <<ピア(peer)は仲間>>

小説や映画、新聞などをテーマに参加者が自由に語り合うプログラムです。シニア世代の生き方、生老病死について一緒に考え、語りあえる“仲間たちの場”になることを目指しています。第1回(5月14日)は映画『みんなで一緒に暮らしたら』、(ステファン・ロブラン監督・スイス)第2回(5月29日)は小説『七十歳死亡法案、可決』(垣谷美雨著・幻冬舎)です。図書館やレンタルビデオを利用してあらかじめ作品に触れておいていただくと、よりお話が進み、深まりますが、見逃した方も(下欄参照)お気軽にご参加ください。

CINEMA

『みんなで一緒に暮らしたら』(2011年)

これはフランス版・終活のお話である。認知症の夫アルベールを抱えたジャンヌは、自らの病が進行していることを知る。独身の好色老人クロードは、女性とのデート中に倒れ、息子に老人ホームに入れられる。ガンコな人情家ピエールは、妻アニーを説得してこの親友を家に引き取る。そこにジャンヌとアルベールも参加して、5人の共同生活が始まる。ジャンヌ役を演じる当時75歳のジェーン・フォンダの「男前ぶり」と、脇役たちの名演技がいい。笑いながら老いと死について、そして高齢者の友情について考えさせてくれる。「みんなで一緒に話したら」話題は尽きないと思う。(上村くにこ)



BOOK

『七十歳死亡法案、可決』

「小説、それは道に沿って持ち廻る鏡である」と名作『赤と黒』にあるが、この小説はまさに現代そして未来の日本社会を映し出す鏡である。

2020年、少子高齢化によって社会保障費は過去最高に膨らみ国家財政は破綻の危機にさらされている。万策尽きて、ついに議会は「国民は70歳になると死ななければならない」という法案を強行採決した。施行は2年後である。

それから何が起こったのか。寝たきりの老人もニートの若者も、国民すべてが意識を変えるのである。自分、家族、社会のことを真剣に考えていく過程が丁寧に描かれる。読者は『檜山節考』の世界を重ねつつ読み進み、法案廃止の結末にほっと胸をなでおろす。

希望を抱かせてくれるが、出来すぎのハッピーエンドだと思うのは、私たちの現実がもっとシビアだということであろう。<<垣谷美雨、幻冬舎>> (饗庭千代子)



支援チームとともに妻を介護して

松田 利庸

私 87 歳、妻 85 歳。「もう十分生きたから、延命のための胃ろうや大きな手術はやめようね」と、常々話していました。

ところが、昨年 3 月、妻が腸閉塞で入院、医師から「開腹手術が必要だが、本人が手術を拒否している」と告げられました。私は妻との別れが、こんなに早く、こんなに突然やってくることにすっかり狼狽し、娘と二人で妻を説得して、手術担当の外科医が漏らした「一か八か」の手術を受けました。詰まっていた小腸の一部 20 c m 切除という手術は幸いに成功しました。

しかし、妻の腸は食物を受け入れることができなくなっていて、点滴から食事をとり始めると下血や嘔吐といったトラブルを繰り返しました。そこで病院がとった処置は CV ポート埋め込み手術というもので、これは口からでなく、肩口の血流の多い中心静脈から心臓に栄養を送る装置です。心臓の負担を軽くするため 6~10 時間点滴をする必要があります。そして同時に消化の良い食物を口からとる必要もあります。



入院前から妻の訪問看護師だった中嶋さんはこの病院が経営する訪問介護センターに所属する有能な人で、妻の入院中から退院後の介護を考え、要介護 2 の介護度を上げておくように要請し、私は市役所、ケアマネジャーに連絡、認定変更の手続きをとり、要介護 5 となりました。

妻は 80 日の入院生活を終え、6 月初めに退院することになりました。退院の数日前、院長回診があり、「これから老健施設に行くんですか」と問われ、自宅に帰ることしか考えていなかったのが驚きました。

退院と同時に、往診医師、訪問看護師、ケアマネジャー、薬剤師、リハビリ師、それとわが娘からなる 10 人近い支援チームがつくられ、妻の在宅医療が始まりました。娘が入っているのは、CV ポートの点滴の開始は看護師が担当が、長時間に及ぶため、娘が終了を担当するためである。この点滴は週 3 回あり、娘は私たちの食事にまで細やかに気配りしてくれ、「老いて知る子の恩」を痛感しております。

8 月に入って、妻は回復期に入り、食事も進み始めたので、週 3 回の点滴を 2 回に減らすことができました。しかし 11 月に入って帯状疱疹を発症して再び食べられなくなり、点滴は週 3 回に逆戻りし、ラコールという栄養剤を飲むことで食の細いのを補っています。12 月になって、帯状疱疹もおさまりの兆候をみせ、日に数時間居間でテレビドラマを楽しむことができるようになっていきます。

私の方はというと、幻視幻聴がでる妻の症状が気になり、入院中ほとんど毎日見舞いに行く傍ら、自分の食事を含む家事にも追い回されて老化が進み、目耳特に足が弱くなって杖を頼りに 200 メートル歩くのがやっとという位です。このまま歩けなくなったら困るので、12 月から週 1 回リハビリセンターに通っています。

以上、「2015 年」妻の病気を巡って、自分の意思決定に、過去 5 年の間に想像文化研究組織で学んだ知識が大変役に立ちました。特に 2012 年、「生きるにいい街、老いるにいい街、死ぬにいい街」プロジェクトで饗庭・宮城両先生たちといろいろな介護施設を見学したことは大変印象に残っています。

今の病院は必要な治療を終えれば、患者に退院を勧めます。その後介護施設に移るか、在宅治療を選択するか、どちらがいいかということは一概に決められないと私は思っています。なぜなら、まず第一に本人の意思、そして介護をする側の状況もよく考えて、共倒れとならないようにしないとイケないと思います。

この小稿が在宅介護を考える方の参考になれば幸いです。



ピンピンコロリ地蔵

北垣 正

先日、晩秋の信州を旅した際、宿泊したホテルの近くにお年寄りに人気があるという“ピンピンコロリ地蔵”を祀るお寺があると聞き、謂われなどを教えてもらうため訪ねた。



中央アルプスの麓、長野県下伊那郡高森町の瑠璃寺の境内

このお地蔵さんは、長野県の農村でよく見かける村民を見守る“道祖神（男女が仲良く手を取り並んでいるなどの路傍の石像）”と同じように、大往生を願うお年寄りの心のよりどころとされるお地蔵さんのようで、その始まりとなったのは“ピンコロ体操”であるらしい。

1980年、長野県から派遣された元高森町社会教育主事・北沢豊治氏が「病気で苦しむことなく、健康で長生きし、死ぬ時はあっさりとお大往生したい」というお年寄りの願いを叶えてあげたいと、簡単に、楽しく、どこでもできる健康長寿“ピンコロ体操”を考案、普及させたものである。

長野県でも、これまで山国特有の塩分の多い味噌汁や漬物食の減塩運動など健康教育の普及に取り組んでいた。その結果いまでは

- ① 日本一の長寿県：厚生労働省公表の2014年の日本人の平均寿命は男性80歳、女性86歳で世界でも名だたる長寿国、中でも長野県は全国一の長寿県である。
しかも亡くなる前まで「ピンピン長生きして、コロリとお大往生する」ことが各種データで実証されている。
- ② 介護を要する高齢者が少ない：世界一の寝たきり大国と言われる日本で、寝たきりで介護を受けるお年寄り“ねんねんコロリ”が少ない。最期まで人の助けを必要とせず、自分で食べ、自分で動き、自立生活する高齢者が多く、寝たきり高齢者率は3.54%（全国平均5.33%）である。
- ③ 日本一幸福な県：（財法）日本総合研究所所長・寺島実郎監修の平成24年発行の「日本でいちばんいい県・都道府県別ランキング」によると、長野県が健康分野、文化分野、生活分野…など総合して幸福度第一位である。

“ピンコロ体操”はどうするのかわからないが、東洋医学の要素を多く取り入れたというこの体操、哲学や宗教でいう「人の生き方が死に方を決める。即ち、よい死に方をしたいならよい生き方をする」という死生学の思想が根底にあるようである。



これから迎える“超高齢・人口減少・大介護社会＝日本”健康管理に努め、生きがいと喜びをもって美しく健やかに老い、天寿を全うする。

私もそうありたいとの思いから、地蔵事務所で買った小さな健康長寿シンボル“ピンコロ地蔵”を眺めながら“無理せず、楽せず、くよくよせず”、自立してQOL(生活・生命の質を高めることを考えている。写真左は北垣さんのお土産に買ったミニ地蔵。上は道祖神(写真提供/北垣さん)

編集後記 ある日の毎日新聞に歌手の加藤登紀子さんと101歳のフォトジャーナリスト笹本恒子さんの対談が載っていました。笹本さんが加藤さんに「72歳、若いわね、70は立派な爛熟期よ」と。少し前、香雪美術館で90歳を超えてなお情熱的な三岸節子の絵に感動したばかり。そして今回、何度か木津川さんの公演を開催している神戸芝居カーニバル事務局長の中島淳さんのご協力インタビューさせていただいた木津川計さん、70歳から始めた一人語り劇場で、膨大な量の台本を覚え、毎年、新作を発表されています。104歳の日野原重明さん、103歳の篠田桃紅さん、「シルバー世代」の活躍、いえいえ、みなさん輝く「ゴールデン・エイジ」です。(井上由紀子)

写真協力/小林文夫 イラスト/うえむらくにこ 協力/ハロー!パソコン教室六甲校

『想文研だより』は6ページになりました。読者ページ、川柳、イラストなど、みなさまのご投稿をお待ちします。



桜が一斉に咲き、新芽が萌え、命輝く季節がふたたび巡ってきた。昨年の桜咲く頃、想像文化研究組織 ICI へ加入させて頂いたが、つい昨日のように感じる。一年を短く感じるのは、脳内時計の刻をきざむ間隔と物理時計のそれとの間に生じた、修正困難な「遅れ」が原因らしい。老化が緩慢に、しかし確実に進行していることの証であろう。

ICI の活動に参加して、初めて「生」と「死」に向き合うことになった。その過程で、何故生まれてきたか、生きる意味、生きる価値、等について思い悩む方々が多いことを知った。また、「死は準備できていない人ほど苦しむ」や「老いは拒絶する人ほど過酷な状況に陥る」という厳しい指摘にも出会った。

前者については、「人生に意味なんてない」と開き直ってしまえば、案外楽になる。過剰な意味づけは人が創作した物語であり、生きてゆく上では、障害にこそなれ、役には立たない。そのうえ、過剰な意味や価値観を背負い込むと、かえって生きづらくなると思う。

後者については、死を恐れ、死を免れたいと切望するのは生き物の常であるとする。禅僧として深い修行を積んだ仙厓義梵和尚は臨終の間際、「死にともない」ともらした。枕元に居た弟子達が慌てて聞き返したところ、末期の精気をふりしぼって、「ほんまに、ほんまに、死にともない」といって息を引き取ったという。多くの高僧や著名人にも、同じような逸話が遺されている。

修行を積んだ高僧であっても、死に臨んで迷うのである。凡人が「死にたくない」と、老いを拒絶し、死に臨んで抵抗するのは当然のことと思う。人は皆死ぬ（死ぬる）。しかしその経験を伝える人はいない。経験知の蓄積がない「死」について思い悩むより、今この瞬間の「生」を全うすることが肝要かと思う。

死生観をめぐって、ICI の活動に参加される方々の要望と私の目指すところには越えがたい障壁があるように感じる。これらを取り除くにはどうすれば良いか、忸怩たる思いでいる。

年始に突然の病を得て、歩行困難となり、日常生活に支障を来すようになった。しばらくの間、想像文化研究組織の活動からはなれ、リハビリと知識の充電に励みたいと思う。

※仙厓義梵は江戸時代の臨済宗古月派の僧

八上桐子の

川柳の窓

選者 八上 桐子

川柳を詠もう…と構えないで、たとえばふと目に留まったものに気持ちを添えて書いてみてください。

「天気雨わるい人ではないのです」これ、私のいまの気持ちです。

娘と孫と女のバトル桃の花 松の次

ぼっぼつと火花を散らしては、またすぐに笑い合う母と娘。桃の花に、微笑まじさがあふれています。

かさかさど落ち景踏みしめゆれるしっぽ 慶乃

響き合うふたつの足音…。楽しげなお散歩風景が目には浮かびました。「ゆれるしっぽ」のひらがなが、犬の尻尾らしくていいですね。

金槌でたたいてみたい石頭 千代女

私のことを言われたのかと、ドキッとしました。頭つて、ほんとに加速度的に固くなりますね…。川柳だけでは歯止めが効きません(笑)

それだけはムリムリムリと娘いう 未羊

ムリが三つも重ねられた「それだけ」って何でしょう？作者は控えていないからこそ川柳にされたはず。やる気に火がついたかも。

春風につておいでと声かける 小雪

なんて素敵なお誘い！電話もメールもいいけど、やっぱり会うのは格別。たんぽぽの綿毛のように、会いに行きましょう。

※次回は、題詠に挑戦してみてください

お題は「声」。身近な人、遠い人…動物、機械…いろいろな声をお待ちしています

元時実新子主宰「川柳大学」会員
神戸新聞文藝川柳壇選者など多方面
で活躍の川柳作家

70歳からの新しいステージは「一人語り劇場」

48年続けた雑誌『上方芸能』の発行人（1998年に菊池寛賞を受賞など）で、大学教授、NHKラジオのレギュラーに加え、「木津川計の一人語り劇場」を立ち上げて10年。博識で謙虚、その語りは柔らかい中にも力があって、観客を魅了します。ラジオ放送の直後にお話を伺いました。



「一人語り」は70歳から始めました。いつまでやれるだろうかと思うことがあるんです。

高倉健が83歳、菅原文太が81歳、僕の好きな劇作家の長谷川伸、愛読した谷崎潤一郎は79歳で逝きました。僕は今、80歳です。まさに“終末期”に入っているのです。心中おだやかではありませんが、僕が今、思いめぐらすことは「あとどれくらい生きられるか」ではなく、「どんな死に方をするだろうか」ということです。一切の延命治療は受けず、従容^{しょうよう}として莞爾^{かんじ}として逝きたいと願うばかりです。

一人語りを続けていくうえで、難儀なことが2つあります。一つは「滑舌」。鶴瓶の師匠の松鶴さんは脳梗塞になって、十八番の『三十石』をやったのですが、舞台を終えて、家に帰るやいなや「鶴瓶、今晚の『三十石』をわしの『三十石』と思わんといてくれ」と言って、ぼろぼろと泣いたそうです。あれほど滑舌の確かだった人が、思うようにいかず、悔しかったのだと思います。

もう一つの難儀が「記憶力」です。一人語りは1時間半ほどの台本を全て暗記するのです。桂米朝さんほどの物知り、訳知り、そして人並み外れた記憶力の持ち主でも晩年は十八番の『鹿政談』の高座で絶句することがあったのです。それを聞いた弟子のざこばが「あれほどのうちの師匠が、そないにならしたか」というて泣いたそうです。それ以後、米朝さんは高座への出演をうんと減らされました。恐くなったのでしょう。

私の支援者から85歳まではやりなさいと課題を与えられていますので、何とかやりたいと思っていますが、滑舌が悪くなったり記憶力が衰えたら、もうできません。

高齢の方々の前で講演する機会も多いのですが、70歳から一人語りを始めたというと、僕が言うのも口幅ったいですが、「激励された」「“希望の星”になった（笑）」と言われるんです。

昔から語りが好きで、有名なアナウンサーの実況放送や阪妻の語り、映画『生きる』の志村喬の語り、などを真似たものです。50歳から常磐津を習いました。常磐津は歌舞伎の女形のようなセリフを語りますが、これが難

しい。マスターするのに苦労して、ようやくできるようになった時、目の前がパッと開けた気がしました。これで一人語りができるのではと思うようになり、立命館大学で86年から2006年まで20年間「芸能文化論」を教えていましたが、70歳の定年を契機に語り始めたのです。

NHKの「ラジオエッセイ」は毎週水曜日の夕方の生放送で、もう35年目になりました。チャンネルを変えられないよう、自分なりに語り方を研究しました。雑誌『上方芸能』を48年やってきましたから、いろんな人の芝居や高座を観たり聞いたりしてきましたので語りを自分なりに理解してきたつもりです。いつか映画『カサブランカ』の素晴らしい英語のナレーションをやってみたいですね。

故マルセ太郎は“スクリーンのない映画館”で『泥の河』を見事に語りました。ストーリーの間の彼なりの解釈には、胸が詰まるほどの哀歎があって、「映画を超えた」とさえ言われたものです。私も作品をどう解釈するかに木津川計ならではの新鮮な切り口が求められます。

毎年一作品をつくっています。これまで『臉の母』や『一本刀土俵入り』、黒澤映画の『生きる』、『父帰る』、『番町皿屋敷』などをやってきました。今、10作目『私は貝になりたい』に取り組んでいます。名作だけに、どういう解釈をするか難しいですね。

雑誌『上方芸能』は5月発行の200号で終刊とします。各界から惜しむ声を寄せていただいています。僕が言うのも不遜ですが、芸能文化の“羅針盤”の役割を果たしてきたのではないかと考えています。今どこにいて、たどってきた道を確認し、どちらに向かえばいいのかの判断基準を示せたのではないだろうかと思っています。

そんな48年間の活動を振り返って、思い残すことはありません。やらねばならないことはすべてなし得たという思いです。

今後の公演予定

5月12日 ピッコロシアター

『一人語り劇場の語りと思想』

6月19日 風月堂ホール

『曾根崎心中』以



